月夜の蝶と蜘蛛

玖月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月夜の蝶と蜘蛛

【Ｎコード】
Ｎ２８３９Ｚ

【作者名】
玖月

【あらすじ】
高杉の命令で、月夜に任務を遂行する姫華。しかし任務は失敗し、彼女は大層美しい蜘蛛の巣にかかってしまうこととなる…。梨栖さんとのコラボ話です。梨栖さんのお許しは頂いております。

（前書き）

今日１２月１０日は梨栖さん家の須藤恋歌さんのお誕生日です！
お誕生日お祝い話に、と「超番外編　ジレンマ」と合わせてコラボ話を書かせていただいたのですが…。

恋歌ちっとも出て来ねぇ！　（「□」；）！！

実はこのお話には、梨栖さんのオリキャラ「出浦時雨」がメインとして出てきます。
「時雨様ぁ！　ウチの姫華に会ってやって下さあぁい！」
という私の願望だだ漏れなお話です。

無断で書いてしまったのですが、梨栖さんが快く許して下さいました…。（つд、）

時雨に姫華と出会って欲しかったので、本当に嬉しいです。梨栖さん、本当にありがとうございました。

以下、時雨が大活躍する梨栖さんの作品です！

「銀魂～美しき蜘蛛の巣にかかりて～」
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０５３１ｑ／

「銀魂～美しき蜘蛛に睨まれて～」
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６４５６ｖ／

とても素敵なのでぜひ読んでみて下さいね！

月が綺麗だった。

満月の夜は絶好の暗殺日和。

姫華は高いビルの屋上から、数ブロック離れた道の屋敷をスコープ越しに見下ろしていた。

スコープから見た先には、屋敷の中で誰かと話をしている女が一人。

おかめのような顔をして、けして美人とは言えない。

それでも、幕吏上層部の妻として税金を横流しし、私欲の限りを尽くしてきた女…。

（幕吏の奥様は贅沢が出来て羨ましいわね）

彼女が税金を我が物顔で私欲に使い込んでいたことがバレたのはここ一月のこと。

怒った民衆、もとい江戸に住まう攘夷浪士たちに命を狙われ始めた彼女は、ああして税金で建てたであろう豪邸に引きこもり、たくさんの護衛をつけている。

最初は攘夷浪士の誰かが暗殺してくれるものとばかり思っていたが、あまりの手際の悪さにとうとう高杉が業を煮やした。

オメェが引導を渡してやれ。

そんなことを言って、彼女の暗殺を姫華に言い渡した。

「人使いが荒いんだから」

ぐちぐちとボヤき、ガションと音を立ててライフルに弾を装填。

「来世では人の役に立ちなさいな」

フェンスに体重を預けて、ライフルを構える。

スコープを覗き込めば、疲れた様子で室内の椅子に腰掛けるおかめ

の姿が見えた。

トリガに指をかけた、まさにその時…。

「…！」

女がこちらを向いて笑った。

姫華は確かにスコープ越しに、彼女と目が合ったと思った。

（あの女、何者…！）

ぞくりと背に寒気が走った瞬間、女の手がブレた。

慌てて姫華がスコープから目を離した瞬間、スコープに勢い良く何かが飛び込みライフルを後方に弾き飛ばす。

「きゃっ…！」

気付かれた…。まさか、こんな距離から…。

転がったライフルを拾い上げれば、スコープには見事にクナイが突き刺さっている。

あんな離れた場所から、ここまで正確に操り憎いクナイを飛ばすなんて…。

「…これは、早く逃げたほうがいいわね」

一人ごちて、姫華はビルを駆け下りた。

ターゲットの女が、屋敷の室内から既に姿を消しているとは、知らず…。

なるべく人通りの少ない道を通って、万斉との待ち合わせ場所に向かう。

闇を駆ける足は止まらない。

いや、止められない。

誰かがついてきているような気がした。急いだ足取りでもないのに、駆けている姫華についてくる。

ビルとビルの間の広い路地に入り込んで、姫華は足を止めた。

「…」

ライフルのトリガに指をかけながら辺りを伺う。

「…鬼ごっこをして、楽しいですか？」

誰とも無しに声をかければ、路地の入り口にゆらりと人影。

それはまさしく姫華の糾弾に倒れるはずだった、あのおかめ女だった。

「楽しいわよ。追い詰めるのがこんな可愛いコじゃ、なおさら」

「趣味が悪いですこと」

姫華はビルの屋上から、すぐに逃げてきたはずだ。

なのに何故、彼女は追いつけた…。

「この人の命を狙うのは雑魚ばかりの男だけかと思ったけど、存外可愛い暗殺者さんもいるものね」

合点がいった。

遠方から姫華の存在に気付いたのも、

姫華に追いついたのも、

彼女は彼女ではないからだ。

「…どちら様ですの？」

おかめがにたりとした。

その手が顔に伸び、耳の下から顔を引き剥がした。

正確には、顔を覆っていたマスクを…。

ビリビリ…。

「…」

おかめの下に隠されていたのは、フランス人形と見紛うほどの美女だった。

脱ぎ捨てた日本髪のカツラの下には、白みがかったふわふわの金髪が月明かりに照らされて輝いている。

そしてこちらを柔らかく見つめる、切れ長の瞳。

「彼女を護るために雇われた、ただの何でも屋よ」

放り捨てたおかめ女のマスクを顎で示し、女は笑う。

「彼女、命を狙われ始めてことの重大さに気付いたらしいの。泣いて頼まれたわ、守ってくれって。最初はこんな奴どうでも良かったけど、おバカな上司がお金に釣られちゃって」

仕方なく身代わりになってたのと、女は煌びやかな着物を脱ぎ捨てる。

その下には、露出度の高い黒い着物。

そこから、羨ましいほど透明感のある手足が伸びている。

腕は袖の代わりにフィンガーレスグローブ。

姫華の死に神衣装同様、動きやすそうな服装だ。

「そのような女のために、貴女が危険に晒されることはないでしょうに」

「私もそう思ったわ。けどね、彼女今回のことで相当応えたらしいの。反省してたみたいだし、それに、まさかこんな可愛い暗殺者に

会えるとは思わなかったし」

なんの話をしているんだ。

姫華は疲れて、ライフルを片手で持ち上げた。

「貴女を倒さねば、帰れないということでしょうか」

「あらいけず。ちょっとはお姉さんに構ってよ」

「お断りしますわ！」

言い様に連射。

スコープは壊されたが、こんな短距離でスコープなどいらない。

だが女は放たれた弾丸をやすやすと避けて見せると、花でも活けるに相応しいたおやかな指でクナイをくるりと回して姫華へ投げた。

姫華がライフルでクナイを弾いた瞬間、女が凄まじい早さで姫華に迫る。

「つっ…！」

女が繰り出したクナイの直接攻撃を、姫華はライフルを盾にしてブロック。

慌てて飛びすさったものの、確認した女はあくまで余裕だった。

「やるじゃない」

鮮やかな朱唇がつり上がる。

態勢を立て直す前に彼女が眼前に迫り、またクナイの攻撃をライフルで防いだものの、あまりの力の強さに姫華の手からライフルが飛ばされてしまった。

「あっ！」

「貰った！」

両手に持ったクナイが風を切る。

万事休すと見せかけた姫華が、不意にニヤリとした。

「！」

姫華の笑みに女も気付いたのだろう。

次の瞬間、女はコンマ1秒にも満たない早さで姿を現した銃口をのぞき込んでいた。

「くっ…！」

バァン！

姫華の銃が爆音を放つ。

女は首を傾けて熱い銃弾をなんとか回避すると、大きく跳躍して姫華との間合いをとった。

「あら、避けられてしまいましたわ。その綺麗なお顔に風穴開けて差し上げようと思いましたのに」

「可愛い顔して残酷なこというじゃない」

爆音が耳に響いたのだろう。

片手で耳を押さえ、女は笑う。

「貴女の相棒は、それじゃなかったのね」

自分が弾き飛ばしたライフルを見やり、女が呟く。

姫華はそうですわと目を細めた。

「わたくしの相棒は、こちらです」

両手に持った短銃を見せる。

女はなるほどねと手を下ろした。

「エロティックな黒い死に神衣装に、操る2丁の銃…。貴女、鬼兵

隊の黒衣の死に神ね」

「ご名答。鬼兵隊参謀補佐、芹沢姫華にございます」

正直に名乗れば、ご丁寧にどうもと金髪の女は笑った。

「名乗ってもらったのに、こちらが名乗らないのは無礼よね。私は時雨。出浦時雨よ」

出浦時雨。

姫華はその名前に聞き覚えがあった。

「まあ、貴女が出浦時雨殿？　お会い出来て嬉しいですわ」

以前、紅桜の事件後に高杉と万斉に聞いていた名前だ。

まさか会えて嬉しいなど言われるとは思っていなかったのだろう。

女もとい時雨は、キョトンとして首を傾げた。

小鳥のように愛らしい仕草だった。

「私を知っているの？」

「ええ。わたくしの恋人が、紅桜の事件の際に貴女に喧嘩を売られたと言っておりました」

おまけに刀まで折られたとぶちぶち呟いていた万斉を思い出す。

万斉に怪我は無かったが、互角にやり合ったと教えられたあたり相当な腕の持ち主なのだろう。

高杉も、松陽師の教本がなければ危なかったと言っていた。

「やだ…、貴女あの男とお付き合いしているの？」

「はい。貴女に殺されなくて良かったですわ」

「殺しておけば良かったわ。あんな根暗そうな奴」

「そんなことを言わないで下さいな。わたくしにとっては、何よりも大切な殿方ですから」

時雨の盛大なため息が聞こえた。

勿体無い、あんな男に貴女みたいな彼女がいるなんてと呟きが聞こえた。

「まぁ、今はそれとこれとは別。いくら可愛い女の子でも、暗殺者を逃すことは出来ないのよねぇ」

「あら、わたくしは捕まりませんわよ」

私から逃げようとでも？

私を捕まえようとでも？

月明かりの中で、二人の女が妖しく笑う。

先に行動に移したのは、金髪美女の時雨だった。

「少し相手をしてちょうだいよ。捕まえるのはあとでにしてあげる」

「貴女を倒せば、私は貴女から逃げられる。…逆に負けたなら、私は貴女に捕まる」

その通りよ。

時雨はそう言い様、素早く取り出したクナイを数本姫華へ投げた。

姫華はそれを回避。

数本を銃で弾き落とした時、目の前に時雨はいなかった。

時雨は大きな月をバックに、宙に浮いていた。

「まあ、貴女は天女様でしたの」

彼女の足元に月光に輝く糸を見つけて白々しく言ってのけると、時雨はそんな大層なものじゃないのよと笑った。

「私はただの、影に生きる小さな蜘蛛よ」

そんな言葉とは裏腹に、時雨は本当に天女の如く、美しい笑みを浮かべている。

「一つ良いことを教えてあげる。蜘蛛の巣は、かかったと分かった時にはもう遅いのよ」

風が吹いて、時雨の柔らかな髪を揺らした。

姫華の死に神衣装も風に舞い、姫華は目を細める。

「貴女に目をつけられた時にはもう遅いと、仰いたいの？」

「解釈はお任せするわ」

時雨の手に数本のクナイ。

時雨の足が宙に張られた糸から離れた時、

姫華も腰を落として、地を蹴った。

高杉や万斉から聞いていた通り、彼女の身軽さには舌をまいた。

彼女に重力は存在しないのか、まるで見えない羽衣でも纏っているかの如くふわりふわりと姫華の銃弾を避けていく。

避ける最中に放たれるクナイは早く、避けることが出来なければ弾くしかないのだが、それがまた重い。

弾く度に銃から痺れが響いてくる。

厄介なのはそれだけではなく、彼女が時折足場として使うために張られるクナイに括られたピアノ線。

既に幾つかが地面から伸びて路地の屋根に掛かっているが、下手に触れようものなら皮膚がざっくりと裂ける。

まるで万斉が操る弦みたいだわと唇を釣り上げたら、しっかりと見られていた。

「何か可笑しい？」

空には既に数本のピアノ線が張られている。

その一本に立って、時雨は訝しげに首を傾げた。

彼女の左頬には赤い血の線。

先ほどから乱射している姫華の銃弾が、やっと彼女を捕らえた証だった。

こちらの証は、体中のいたるところについているが…。

「いいえ。わたくしの恋人も弦を操るので…、似ているなと思っただけですわ」

「ふうん、あの細腕でねぇ…」

「…」

姫華は首を傾げたくなった。

ジャケットに隠されてはいるが、万斉の腕は鍛えられた筋肉がついていてけして細腕と言えるものではない。

「貴女があんな男の恋人だなんて、ホンットもったいない。どこがいいのあんな男の」

「あら、彼が貴女の気に障るようなことでもしましたか？」

どうも先ほどから時雨の万斉に対する態度が厳しい。

万斉が彼女に何かしたのだろうか。

「別に。私は世の中全ての男が大嫌いなの。そんな男と貴女がつきあってるなんて聞いたら気分悪いわ」

「…貴女が過去にどんな仕打ちを受けてきたかは分かりかねますが、全ての男がみなそうではありませんわ。彼はわたくしの命の恩人で

あり、わたくしを何よりも大事にしてくれる優しい方です」

「かつて共に戦った仲間の首を取ろうとした男のどこが優しいというの？」

一見成立しているようでズレているこの会話にお気づきだろうか。

姫華は時雨が勘違いをしていることに気づき、パチパチと目を瞬かせる。

「貴女は…」

「おしゃべりはおしまい。性格の悪い男の話をしてたらイライラして来たわ」

「あら、八つ当たりしないで下さいませね」

そんなことしないわ。

時雨の唇が妖艶につり上がったと思いきや、その手がブレたのを姫華は確認した。

ダンスのステップを踏むように身をよじれば、皮膚スレスレをクナイが通り過ぎていく。

そのクナイには勿論ピアノ線が括り付けられていて…。

「つっ…」

避けつつ時雨を攻撃するものの、時雨は張ったばかりのピアノ線を軽々と移動し、クナイの雨を降らせる。

やがて気付いた時には、己の前後左右上下全てに、ピアノ線が光っていた。

もはや姫華が動ける範囲などたかが知れている。

下手に動けば、研ぎ澄まされたピアノ線で皮膚を切られる。

動かなくても、時雨の次の攻撃で殺られる。

透明の糸に絡まれ、もがき、弱った時に喰らい尽くされる…。

「蜘蛛の巣にかかった獲物の気持ちというものを初めて知りましたわ」

月明かりを受けて輝くピアノ線は、まさしく大きな蜘蛛の巣。

姫華は時雨という名の蜘蛛の巣にかかった、哀れな獲物…。

「そうでしょうね、私もこんな綺麗な蝶々を捕まえられたのは初めてだわ」

相変わらず一本のピアノ線のみに立っている時雨に、姫華は自分の立場を忘れたかのように笑ってみせた。

「まあ、お上手ですこと」

「…随分余裕ね。万事休すだっていうのに」

そうでもありませんわ。

姫華は笑みを絶やさなかった。

「時雨殿。貴女は先ほど、蜘蛛の巣にかかったと気付いた時にはもう逃げられないというようなことを仰いましたが、一つだけ蜘蛛の巣から逃げ去る方法がありますのよ」

その余裕綽々とした笑みは、今までこの技に絶対の自信を持ってきた時雨の神経を逆なでしたのだろう。

美しい顔が、不機嫌そうに歪んだ。

「そう…、じゃあ今後の参考に教えて貰おうかしら？」

「ふふ」

姫華は嬉しそうに笑った。

姫華は確かに、屋根を渡る足音を聞いた。

「第三者に助けてもらえばいいのですよ」

姫華の前に、一陣の風が舞い降りる。

ブチブチッとピアノ線が断ち切られる音が響いて、時雨は目を見開いた。

彼女が立っていた糸も切られ、時雨はふわりと地面に降り立つ。

ピアノ線を切り裂き、コートをはためかせて舞い降りたのは、

他ならぬ、万斉だった。

「姫華、無事か」

「ええ」

姫華を後ろに庇いながら、万斉は時雨と対峙する。

予期せぬ万斉の登場に、時雨はえらく機嫌を害したようだ。

「男風情が邪魔しないで貰える？」

「姫華に危機が迫っているなら話は別。この華散らす者、誰でありと許さぬ」

刀を構える万斉に、時雨が怪訝そうに眉を寄せた。

この男はなにを言っているのだろう、そう言いたげな表情だった。

理由が分かっている姫華は思わず肩を揺らして笑い、万斉へ歩み寄る。

「紹介しますわ時雨殿。彼がわたくしの愛しい殿方、河上万斉でございます」

どこかで、ぴきっと音がした。

「姫華！　いきなり何を…！」

月明かりで、万斉が赤面したのが十分分かる。

姫華はまた笑って、万斉の腕に抱きついた。

「だぁって、彼女が勘違いしているんだもの」

その彼女を見てみると、時雨は困ったような信じられないような複雑な顔をして、硬直していた。

「勘違い？」

万斉もぽかんとしていると、時雨がなんとか我に返ったようで声を上げた。

「貴女の恋人ってそいつだったの！？　あの性格最悪根暗な総統じゃなくて！？」

ほら勘違いしてたと、そして高杉へのあながち間違いではない酷い言いぐさに姫華はクスクス笑う。

先ほどから何かおかしいなとは思ったのだ。

可笑しくて笑う姫華の代わりに、万斉が「なっ…」と絶句する。

「晋助なんぞに姫華はやるか！」

「うるさいわね！　そのコならあなたより総統さんのほうがまだ０．１ミリくらい似合ってるわよ！　芝生みたいな頭してデカい口叩くんじゃないわよ」

芝生…！　と万斉が絶句し、姫華は耐えきれずに吹き出して笑い出した。

「こ、こら姫華…！」

「だってしば…芝生…」

逞しい腕に抱きつき、ふるふると笑いをこらえる姫華。

どうやらツボにはまったらしい。

笑われる万斉の顔は真っ赤だ。

「あまり万斉をいじめないで下さいな、時雨殿。わたくしの一番大切な方ですので」

「その一番大切な人を笑ったわよ貴女…」

姫華はもう一度ふふっと笑って、万斉に「行きましょう」と促した。

「今日は帰らせていただきますわ。またお会いしましょうね、時雨殿」

「今度は貴女の恋人も総統さんも無しでね」

にっこりと笑いかけてきた姫華を時雨から攫うように横抱きにした万斉が、ひょいと屋根に上る。

「さようなら」

笑顔でその一言を残して、姫華と万斉は闇に消えた。

時雨はしばらくそのまま動かず、二人が消えた方向を見やっていた。

「…世の中おかしい…」

時雨との戦闘から一夜明けて、姫華は丙寅丸の甲板でコンテナに座り込んでいた。

彼女の指には、昨夜どさくさ紛れにちょろまかした時雨のクナイがある。

細い指がクルクルとクナイを回すが、時雨のようにスムーズにいかない。

こんな難しいものをよく操るものだ。

多少疼く体中の傷を感じながら、クナイをもてあそんでいた時だった。

「はっくしゅん！　ぐしっ！」

奇妙な音が響いて、驚いてクナイを落としてしまった。

覗き込んだコンテナの下には、ずっ…と鼻をすする万斉がいた。

「万斉、風邪？」

「いや、誰かが噂をしているのであろう」

大した助走もつけずにヒョイとコンテナに上がってきた万斉に、姫華はクスクス笑う。

「彼女が悪口を言っているのかも」

くしゃみ2回の噂話は悪口という。

示されたクナイを見た万斉は、昨日は驚いたでござるよと姫華の隣に腰掛けた。

姫華の帰りが遅いなと思ったら、まさかのあの出浦時雨と一戦交えていたのだ。

彼女が腕のたつ”一般市民”であることは身を持って知っていたため、肝が冷えた。

「貴方や晋助様が教えていてくれなかったら、油断していたかも知れないわ」

教えてられていてもこのざまだけどと、姫華は自身の腕を見る。

クナイやピアノ線によって付けられた浅い傷。

万斉が心配してベタベタと絆創膏を貼り付けてくれるものだから、腕白小僧のような腕になってしまった。

「拙者はもう二度とあの女には会いたくないでござる」

ムス…とふてくされる万斉に、姫華は耐えきれずクスクス笑う。

それもだんだん可笑しくなってしまって肩を震わせていたら、こらと怒られた。

「姫華、笑いすぎだ」

「だって…。ふふっ」

昨夜の、万斉に対する時雨の台詞「芝生みたいな頭」が、どうにも姫華のツボにハマってしまったらしい。

流石に「芝生」は嫌だったのだろう。

まだ笑い続ける姫華の肩を掴み、万斉はコンテナに押し付ける。

「ひ〜め〜か〜ぁ…」

怒られているのは分かるが、どうにも姫華の笑いは止まらない。

「だってだって…、晋助様のあのお言葉を思い出しちゃって…。ふふっ…」

以前、万斉が高杉と任務について対立してくだらない口論が起きた時の話だ。

ムキになった高杉は万斉に言い放ったのだ、

「このマリモ頭！」

と。

「あの晋助様がマリモ…マリモって…」

まだ笑い足らなそうに肩を震わせるものだから、万斉もいい加減ムッとしたのだろう。

「マリモも酷いが、芝生はもっと酷い。生き物ではないではないか」

「でもどちらも言い得て妙よね」

「うるさい」

姫華を黙らせるように、その唇へキスを落とす。

姫華の手がもてあそんでいたクナイを放し、万斉の首に回される。

クナイがコンテナから転げ落ち、甲高い音を立てた。

出浦時雨殿。

お借りしたクナイ、いつかきっとお返しに参ります。

ですがその時は、

絶対に負けませんわ。

終

（後書き）

あー楽しかったっ！　万斉さん振り回してごめんなさいでした。「芝生」は流石にひどかったかなと自分でも思いました。　あれ、作文？

時雨様！　姫華と出会ってくれて本当にありがとう！
梨栖さん！　また書かせてくれてありがとうございます！
そして梨栖さんのオリキャラ、今日が誕生日の恋歌…。

全然出て来なくてごめんなさい！　本当にごめんなさい！　あ、怒らないで！　その危ないものしまってー！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2839z/

月夜の蝶と蜘蛛

2011年12月10日01時03分発行